

【水の作文大賞】

水の恵みに感謝する

玉名市立玉名中学校 二年 山下 真愛

祖父母の家へ向かう道の最後の曲がり角に、大きなタンクがある。直径約十メートル、高さ五メートルほど。壁面には、玉名市の名物である高瀬目鏡橋と、花しようぶが描かれている。

幼いころから、何度となく横を通り過ぎてきて、「この建物は何だろう？」と、いつも思っていた。

ここは、溝上水源地という。このタンクの下で、地下水がくみ上げられている。今回調べて分かったことだが、玉名市で上水道が普及している世帯の約三分の二が、ここでくみ上げた地下水を利用しているという。まさに、玉名市民の命を守っている大切な水源が、こんな身近な所にあったのかと、とてもおどろいた。

小学六年のとき、この水源地のすぐとなりの田んぼで、田植えをしたことがある。ふだん私は、同じ玉名市内だけれど、そこから車で十分くらいの住宅地に住んでいる。そのときは、私の地元の子どもの会の行事で、小学生十人ほどが参加したが、みんな田植えは初めての経験だった。

田んぼに足を入れたとき、ぬるぬるとしたどろろの感覚がとても気持ち悪く、苦手な虫もたくさんいて、最初は早く田んぼから出たくてしようがなかった。

でも、苗を三、四本ずつ、人差し指と中指と親指でつまんで、どろろに差し込むように植えて行くうちに、足の感触にも慣れて、だんだん楽しくなってきた。

約一時間で、田んぼ一枚の半分くらい進んだ。そのころには汗びっしょり、手足はどろどろだらけになり、腰がとても痛かった。

終わってから、田んぼのわきにある、地下水のポンプで、みんな泥を落したり、体を洗ったりした。このときの水の冷たさと、どろどろ

き出てくる水量、そして、何より、すみ切った水のきれいさに、とても感動した。あまりの気持ちよさに、顔を何度も何度も洗って、手ですぐってごくごく飲んだ。「こんなにきれいでおいしい水が、ここで生まれているんだな」と、私は自分のふるさとをほこりに思った。しかも、この水が玉名市全域に送られていることがとてもうれしかった。

ひとつ思い出したことがある。それは、大分県に住む父方の祖父母が、熊本に来るたびに、

「熊本の水はおいしいなあ。」

と言って、おかわりして飲んでいた。祖父母に聞いたら、大分は川の水を消毒して水道水に使っているそう。水道水を地下水でまかなっている自治体は全国でもめずらしいということも教えてもらった。私は、「天然のミネラルウォーターが水道から出てくるなんて、こんなしあわせなことはない。大事に使わなきゃ」と思った。

自分たちで田植えしたお米は、秋に収穫して、おにぎりにして食べた。もちもちして、ほんのり甘くて、今まで食べたおにぎりの中で、一番おいしいと思った。

そのおいしさの理由は、自分たちで植えたということだけでなく、とてもきれいな水と、豊かな自然の中で育ったからだろうと思った。

祖父母の家の周りは山ばかりで、これまでは何にもなくてつまらないなど思っていた。でも、そうした豊かな自然があるからこそ、きれいな水が生まれ、その水によって、おいしい米や農作物ができる。

私たちが当たり前前に感じていることは実は当たり前ではなく、貴重な財産なのだと気づかされた。これからはそのことに感謝の気持ちを持ちながら、日々の生活を過ごし、将来の子どもたちにもこの素晴らしさを伝えていきたいと思う。